

地域における 「共生」を考える



 **9月26日**  **13:00~16:30**

1. 開講式

興膳 健太氏 (猪鹿庁長官)

2. 講演

郡上で自然との共生を考える ~NPO活動の観点から~

3. 総合討論

肥後 睦輝 (生物学)

ヒトの暮らしと森林のかかわりの昔、今、そしてこれから

山口未花子 (人類学)

**私が生まれた家にはゴミ箱がなかった：
カナダ先住民カスカの資源利用に見る循環の思想**

 **9月27日**  **13:00~17:00**

1. 講演

橋本永貢子 (現代中国語学)

2. 総合討論

外国人市民との共生に向けて

3. 閉講式

新井田智幸 (経済学)

格差と「共生」ーピケティブームが示したもの

竹内 章郎 (哲学)

能力次元からの共生(共に生きる)とはどういうことか?

受講料無料

会場 岐阜大学地域科学部(岐阜市柳戸1番1)
1階 地域科学部 地101教室

受講対象者 高校生以上の市民一般
(関心のある方なら、どなたでも受講できます。)

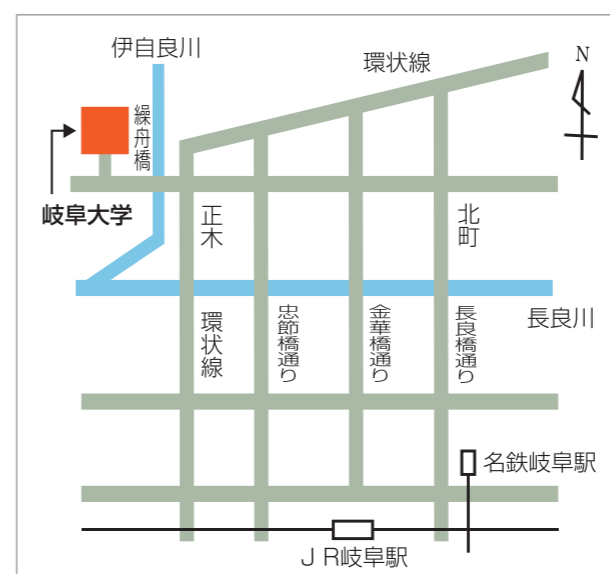
募集人数 **100名**
(定員を超えたときは、お断りすることがあります。)

申込期限 **9月4日(金)**

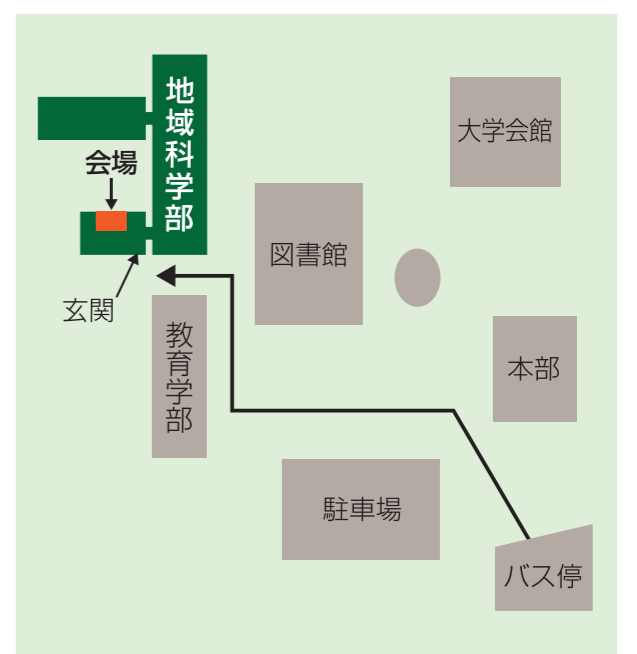
申込先 〒501-1193 岐阜市柳戸1番1 岐阜大学地域科学部総務係
TEL: 058-293-3003 FAX: 058-293-3008 E-mail: chiiki@gifu-u.ac.jp

申込方法

受講を希望される方は、「住所、氏名、年齢、電話番号」を明記の上、**郵送・持参・FAX・E-mail**のいずれかの方法により下記へお申込みください。手話などの別途対応が必要な方は、お申し込み時にご相談ください。ご連絡いただいた皆様情報は、公開講座の目的に必要な範囲内において使用いたします。ご自身の個人情報の開示・訂正・削除を希望される場合には、下記にご連絡ください。



岐阜大学
JR岐阜駅前、名鉄岐阜駅前から岐阜バス乗車(約30分)



講演内容

9月26日(土)

郡上で自然との共生を考える～NPO活動の観点から～

興膳健太 (猪鹿庁長官)

福岡県出身。郡上へ移り住み、「NPO法人メタセコイアの森の仲間たち」の代表理事として、自然体験を通じたまちづくり活動を行っています。

「ずっと暮らし続けられる郡上をつくること」を軸に、豊富な自然体験プログラムを通して郡上ファンを増加させること、郡上で役に立つ人材を育成することの2つの柱で活動中。

さらに、近年里山が抱える獣害の問題と向き合い、猟師の仕事をする多くの人に知ってもらおうと、「猪鹿(いのしか)庁」と名付けた里山保全組織を結成し、猟師の第六次産業化にも取り組んでいます。

本講演では、こうした活動を通して見えてきたさまざまなことについて具体例を挙げながらお話したいと思います。

ヒトの暮らしと森林のかかわりの昔、今、そしてこれから

肥後睦輝 (生物学)

日本は森林率67%と世界でも有数の森林の国です。周りを見るとどこにでも、いつでも緑の森林があります。では、ヒトと森林は共生しているのでしょうか。ヒトは森林の恵みを受けて生きているのは確かです。でもヒトがいなくなっても、森林はなくならないでしょう。これは共生ではなく寄生という関係です。縄文時代以降、ヒトは人口の増加とともに森林を伐り開き、焼き払い、木材、燃料、肥料、食糧として森林資源を搾取し続けてきたのです。江戸時代中ごろには森林率が20%くらいまで低下し、日本中の山が禿山になったとも考えられています。森林の国となったのはつい最近のことです。今の日本で豊かに見える森林も多くの問題を抱えています。この地球には、かつて森林を失って滅んだ文明もあれば、森林の逆襲で滅んだ文明もあります。環境意識の高まっている今こそ、森林とのつきあい方をきちんと考えて、ヒトと森林が共存する道を考えなければならぬのです。

私が生まれた家にはゴミ箱がなかった：カナダ先住民カスカの資源利用に見る循環の思想

山口未花子 (人類学)

カナダ、ユーコン準州の先住民カスカの人々、特に古老世代は、まだ伝統的な狩猟採集生活が続けられていた時代に生まれ育ちました。そうした時代を振り返って古老達は「あの頃はゴミ箱が家になかった」と語ります。その時代、すべてのものは価値を持ちながら形を変えていきました。動物の体は食べ物(肉)、衣服(皮)、道具(骨)に形を変え、古くなった衣服は敷物や犬の餌になります。人間同士の間でも、シェアリング(分け合い)という規範の元、資源が均等に分配され、平等な社会が作られていました。さらに異なる動物種や大地、水、石、天体といったすべてのものは循環する存在とみなされていました。すなわち、土に根を張り、水を吸い上げた植物を草食動物が食べ、その動物を肉食動物が食べ、やがては肉食動物の体も土に戻っていきます。一方で魂は滅びることはなく永遠に再生し続けます。本講義ではカスカの人々の循環の思想を読み解くことで、自然との共生について考えてみたいと思います。

9月27日(日)

外国人市民との共生に向けて

橋本永貢子 (現代中国語学)

かつて国際交流という言葉で表現されていた状況が、昨今では多文化共生、あるいはダイバーシティという言葉で語られるようになってきました。国際交流という言葉には、外国人と交流するが、彼らは異なるコミュニティに属する人だという意味合いが含まれます。一方、多文化共生という言葉には、外国人が異なる背景を持つことを理解し、同じコミュニティでまさに"共"に"生"きるという思いが読み取れます。

こうした状況を背景に、各自治体でも「多文化共生推進」と銘打った政策を打ち出し、岐阜市では平成22年に続き、今春第二次基本計画を策定しました。今回の講座では、第二次計画の策定に先立って実施された『外国人市民生活実態調査』の結果をもとに、岐阜市在住外国人市民の意識を分析します。また、多文化共生のために言語学の立場から取り組まれている研究についても紹介します。

格差と「共生」ーピケティブームが示したもの

新井田智幸 (経済学)

2015年はピケティの『21世紀の資本』の大ブームと共に幕を開けました。そこでは通説が実証的に批判され、現代の資本主義の発展は格差を拡大させる傾向を持つことが示されています。この分厚い経済書がベストセラーになるという社会現象は、格差拡大が広範に実感され、そのメカニズムの解明と処方箋が強く求められている現代社会の状況を浮かび上がらせたといえます。

しかし、格差の拡大に対して、どうしてこれほどの注目が集まるのでしょうか。格差は何が問題なのでしょう。その応答の一つとして、共同体の機能を経済人類学的に捉える方法があります。人が「共に生きる」社会を持続可能なものにするには、資本主義の論理だけで編成することはできないという知見が、そこに示されています。格差への抵抗を切り口に、人々の社会における「共生」について考えてみたいと思います。

能力次元からの共生(共に生きる)とはどういうことか？

竹内章郎 (哲学)

自然との共生や在日外国人との共生など、共生という言葉は少し前から流行りですが、この日本語のはしりは多分、養護学校(現、特別支援学校)義務制度化の是非を巡る1970年代の運動・議論での共生共育論です。当初は賛否両論喧しかったこの共生論は遡れば生物界の共棲にも通じ、人類全般の道標としても奥深い議論になる可能性があります。ただ人間社会に関わる既存の共生論は、男女間にせよ民族間にせよ共生を諸個人や人間集団の「間」に位置づけ、個人[利己]主義的現状や対立や争いの克服に資する目指すべき目的・理想として共生を捉えてきました。しかしもし個人の内部・内面自体の内に共生が成立するならば、目指すべき共生の在り様もかなり変わります。以上の見通しの下この講義では、ロールズの「才能の配分の共有資産」論や障がい把握の社会モデルを参照しつつ、未完ながら20数年来の私の「能力の共同性」論を下敷きに、社会的弱者も含みうる共生論を考えます。